

『背負ってしまった』ものにつき動かされて

僕はこの10年ほど、富士山の樹海やエベレストの清掃をしています。山でゴミを拾ううち、ゴミを拾わなくてもゴミの出来ない社会やゴミの出ない富士山にするにはどうすればいいのか、全体の意識の向上をはかるにはどうすればいいのか、について考えるようになり、環境教育の必要性を感じて環境学校を作りました。

一方、エベレストでゴミを拾っているとき、最近はずっと大きな問題を感じます。僕たちがヒマラヤへ行くのは9月下旬から5月頃までの乾期、ほとんど雨の降らない寒い時期です。ところがいつからか乾期に雨が降るようになった。最近では標高5000m半ばでもみぞれまじりの雨が降る。雨が降って氷河が溶け、至る所で雪崩による遭難が増えていく。こうしてヒマラヤに通ってゴミを拾ううちに「ヒマラヤの気候がおかしいぞ」と気づき、遭難事故の増加を知って、温暖化の影響でヒマラヤが溶けてきていることを知りました。

登山家として世界中のいろんな現場に行き、自分の目で現地の状況を見る。見ることは知ること。知ることと同時に、

いつらをぶん殴ってこい」と。アラブ人の発想には、やられたらやり返すという考え方が根本にある。特に、男にはそれを求めます。「一発殴られたら十発殴れ。そのうち相手は嫌になる」と、母ちゃんと言うわけです。

でも、殴り返すなんて簡単にはできません。そのうち集団無視をされるようになった。叩かれるよりも無視の方がこたえました。ある朝、布団の中で「もう幼稚園には行かない」と決めたのです。ところが母ちゃんはいきなり布団をはいて、寝間着の上から僕のちんちんをギョツとつかんだ。ねじって引きちぎろうとしたんです。ねじりながら「あなた、いじめられたから行かないの？ あなた逃げるの？ あなた男じゃない。だからこれ、要らない」と言う。母ちゃん、本気でです。

略歴 野口 健（のぐち・けん）氏

1973年8月21日アメリカ・ボストン生まれ。ニューヨーク、サウジアラビアで幼少時代を過ごし、4歳の時にはじめて日本の地を踏む。小学4年生の時に再び日本を離れてエジプトへ。その後中学、高校は英国立教院に入学。高校卒業後、亜細亜大学国際関係学部に入學。高校時代に植村直己氏の著書『青春を山に賭けて』に感銘を受け、登山を始める。1999年、エベレストの登頂に成功し、7大陸最高峰世界最年少登頂記録を25歳で樹立。2000年からはエベレストや富士山での清掃登山を開始。以後、全国の小中学生を主な対象とした「野口健・環境学校」を開校するなど積極的に環境問題への取り組みを行っている。

野口健公式ウェブ사이트 <http://www.noguchi-ken.com/index.html>

レクチャー

香里中学校・高等学校
創立60周年記念式典 特別講演

目標をもって生きる ことのすばらしさ

アルビニスト 野口 健氏



どこか気持ちの中で「背負ってしまう」ことになる。ヒマラヤや富士山のゴミについて、僕は登山家として知ってしまったが故にどこかで背負ってしまい、だからアクションを起こしたのかなと思っています。

いじめから逃げることを
許されなかった幼少期

僕はアメリカで生まれました。半年後にサウジアラビアへ引っ越して、日本に初めて帰国したのは4歳前後の時。そして日本の幼稚園に入りました。

教室に入ると、同級生たちが僕の顔を見てギョツとした表情をしました。当時の僕は日本語がうまくできなかったから、自己紹介もアラビア語。もう教室は完全にドン引きです。僕がこういう顔をしているのは、父は日本人だけど母は外国人だから。母ちゃんはエジプト生まれのエジプト育ちで、フランス、ギリシャ、エジプト、レバノンの4か国の血が入っている。だから僕の体には、計5か国の血が流れています。

さて、幼稚園は大騒ぎになりました。早速いじめに遭った。泣きながら家に帰ると、アラブ人の母ちゃんが「誰と誰にやられたのか」と聞く。「だったら、そ

長い爪が食い込んでくるんです。もう恐怖で、今もトラウマです。「行かない」という選択肢は、結局与えられませんでした。

逃げない姿勢が積み上げたもの

幼稚園に行っても友だちはできない。でも友だちは欲しい。すると、無意識のうちに違う場所で友だちを探すんですね。帰り道、通学路にあった商店街に立ち寄ってみた。小さくてガイジンみたいな子どもが下手な日本語でしゃべるもんだから、あちこちの店の人がかわいがってくれました。商店街に大人の友だちがいっぱいできた。あの時も母ちゃんが「行かなくていいよ」と言ったら、僕は違う場所に友だちを探しに行つたんだろうかと考えると、行かなかったと思うんです。

子どもには子どものいじめ問題があるように、大人にもいろいろあります。僕の活動に対しても様々な意見があります。初めてエベレストに行った時に見た多くのゴミの中には、漢字や平仮名の書かれた日本製品が随分混じっていました。世界中から「日本人が捨てているんだ」と言われ、日本人の僕はゴミを拾いに行くようになった。エベレストが汚いことが日本でも知られるようになると、犯人探しが始まった。日本のどこの登山隊がゴミを放置してきたのかと。山の世界はけっして広くないので「野口健が暴露した」「野口健はけしからん」と言われるようになった。これは結構しんどかったです。富士山の清掃活動も同じです。富士山が汚い。特に樹海は不法投棄がひどい。現在、富士山五合目に入るのは年間300万人、山頂まで行くのは20数万人という数字は、確かに多すぎる。だから、もし世界遺産になれば入山規制の問題が出るでしょう。自然保護のために入山料の徴収が始まるかもしれない。海外ではごく当たり前に行われていることが日本でも起きるのではという、噂が流れました。地元の人、入山規制なんかしたら観光客が減るし、公共事業もできなくなるのではと心配になった。つまり富士山の世

界遺産と環境保全の問題が出ると、地元
の足を引っ張るのではという意見が僕の
ところへ来た。僕は今、フィリピンや沖
縄で主に日本兵の遺骨収集もしています
ここでも「アジアを侵略した日本兵をあ
なたは大事にしている」「あの戦争を美
化している」「あなたは右翼だ」と言わ
れる。

何か行動を起こすと、必ずいろんな意
見が来ます。それでも活動を続けるかど
うか、悩むこともある。でも、その時に
いつも、母ちゃんにギュッととねじられ
た、あの出来事を思い出すんですね。

人間、逃げようと思えばいつでも逃げ
られます。僕も逃げることを体が覚えて
いたら、富士山での活動を批判された時
も「もうやめようか」と考えたと思う。
いろんな成長過程があるから一概には言
えないけど、僕にとっては、あれでよか
ったのかなと思います。

山登りの世界へ導いた一冊の本

僕は子ども時代にいじめられ、日本語
も上手にできない、たいして勉強もでき
ない。ずるずる行つて、落ちこぼれまし
た。高校に上がると今度は、ぐれ始めた
学校で先輩と喧嘩になつて思わず手を出
したら、相手の鼻が折れた。1か月の停

学処分を受けました。勉強もできない上
に暴力事件まで起こした。人生、落ちる
ところまで落ちたなど。15歳の時です。

1か月間大阪の親戚の家に泊まりなが
ら、ぶらぶらしていました。ある日、ふ
らりと本屋に入った。その店に『青春を
山に賭けよう』という本があった。植村直
己さんという人の本でした。名前はよく
覚えていなかったけど、植村さんがアラ
スカのマッキンリーで遭難された時のニ
ュースが何となく記憶に残っていました
ピンと来たんですね。買って読んでみま
した。

あの本で一番印象に残ったのは、植村
さんご自身も自分を「落ちこぼれ」と言
っていることでした。彼は紆余曲折を経
て東京で大学に入り、山岳部に入ります
4年生になって就職活動をしでも、どこ
にも決まらない。その時、やつぱりおれ
は落ちこぼれかと思つたらしい。

植村さんが出した結論はこうです。山
岳部の仲間が本当はヒマラヤに行きたい
のに、本心を抑えて就職する。それなら
本当はみんながやりたかったことを僕が
やれば、みんなに少しは追いつけるかも
しれない。彼はお金を稼ぐために日本を
飛び出し、働きながらアメリカからフラ
ンスへ渡ります。お金を少しずつ貯めて

本当にもっと危ないのは、幅が1m前後
で、そのくせやたら深いクレパスです。
深さが100m、200mもある。
幅が1m程度だと、雪が降って風が吹
くと、表面にだけ雪がついてクレパスが
見えなくなります。単独で行くとロープ
で結び合う相手がいないから、ここに落
ちると基本的に助かりません。考えた末
、単独行に挑むため植村さんと同じ方法を
取ることにしました。竹竿を刀みたいに
腰にくくり付けば、落ちてでも割れ目に
引っかかります。約2・5mの竹竿を1
本買って、マッキンリーへ行きました。

大きなクレパスはうつすらラインが見
えていました。でもよく見ると、進行方
向に沿っていろんな角度にクレパスのひ
びが入っている。これでは、竹竿を差し
ていてもそのまま落ちることに気づいた。
経験不足の僕には、クレパスは進行方向
を横切っているものというイメージしか
なかったんですね。これはしまった。竹
竿を2本買って、×印に組めばよかった。
落ちませんようにと願いながら3、4
日歩いたら、今度はガスが出てきました。
足元も見えなくなり、自分の指先ですら
やつと見えるくらい。「ホワイトアウト」
と呼ばれる現象です。そういう時はでき
ればあまり歩かない方がいいのに、不安

と恐怖でいっぱいになった。氷河には基
本的に生き物がいないから、普段の生活
で感じる匂いも無い。色もほとんど無い
匂いと色が無くなると、人間はとても不
安になります。初めての経験でした。
とにかく怖い。早く登って早く下りた
い。早くガスから抜け出したい。焦つて
凄く霧の中を歩いていくと何かに、すと
んと落ちた。両足がぶらんぶらんして
竹竿がミシミシと音を立てて、体が沈ん
でいく。頭の中は真っ白です。右手を伸
ばし、何度も失敗しながらピッケルの先
を反対側にやつと突き刺した。ザックを
合わせると100キロはある体を持ち上
げようと、必死にもがいた。左手でもも
がくうち、ようやく反対岸に上がれまし
た。息は切れるし、胃液まで吐きました。

僕の落ちかけたクレパスは、覗いてみ
ると100m以上はありました。ぞつと
して「もう帰ろう」と思つたその時、「マ
ッキンリーなんておまえには無理だ」と
言つた人たちの顔が、パンパンパン、と
見えたんですね。悔しい。考えた末、次
に何かあつたら今度こそ日本に帰ろうと
自分の中で決めて、また歩き始めました。
何時間か歩くと雲の上に出て、視界が
開けた。さらに歩くと雪の中に一点、小
さな黒い塊が見えました。鳥が1羽、カ

はヨーロッパの山やアフリカのキリマン
ジャロに登ったり、南米、北米、世界中
を放浪したりした。こつこつ、こつこつ、
こつこつ、彼は登り続けました。

彼は、そのとき自分にできることを本
当にこつこつ続けた結果として、日本人
としてエベレスト初登頂を果たし、結果
的に世界初の五大陸最高峰登頂を達成し
ました。停学になって精神的に追い詰め
られた中でそれを読んだ僕の心に、いつ
べんに光が射しました。僕も何か一つの
ことをこつこつ続けていけば、何かを成
し遂げられるのかもしれない。人間は追
い詰められると、目が開くんですね。何
かを一所懸命に探すうちにあの本に出合
い、山の世界に入ったんです。

マッキンリーで味わった 恐怖と解放感

北米大陸の最高峰マッキンリーは、僕
の中ではとりわけ大きな存在です。行つ
たのは19歳の時。遭難された植村さんは
単独で行つたから、僕も単独で行きたい
と思つた。ところが山の先輩たちから「無
理だ」と止められました。ましてや単独
行はやめた方がいいと。クレパスがある
からです。大きく口が開いているクレパ
スはまだいい。ハシゴを架けて渡れます

チンコチンに凍っていた。手に取つて見
つめて何を感じたかという、マッキン
リーで単独行をしている僕も結局この鳥
と同じ、点なんです。「僕もこの鳥みた
いに凍っちゃうの?」と再び恐怖に襲わ
れた次の瞬間、今まで自分が振り回され
てきた悩みやコンプレックスが、ずつと
小さなものに思えました。狭かった視野
が開けて、コンプレックスがさーつと流
れていった。恐怖以上に解放感があつて、
一気に前向きになった。それから1週間
か10日かけてやつと山頂に登り、日本に
帰りました。

心の弱さが失敗させた エベレスト初挑戦

一番大変だったのは97年、23歳でのエ
ベレスト初挑戦です。達成できれば最年
少記録ということで、僕は登山家として
初めて注目されました。エベレストに
行つて一番驚いたのは、ゴミの多さもそ
うだけど、300人以上の人が遭難して亡
くなっていることでした。毎年、遭難者
が出る。標高7000mを越えていくと
遭難者の遺体があちこちで凍っている。
それを見ながら登っていくんです。

僕は19歳の時、山の仲間を初めて遭難
事故で失っています。6000mも落ちた

彼は数か月後によく発見され、遺体は相当潰れていました。ご両親が彼の遺体と対面した時、お母さんはどうされたか。原形をとどめず腐敗臭する息子を躊躇せず抱きかかえて、頬ずりをされました。それまで僕の中で、死とは自分の冒険に命を賭けた結果で、どこかっこいいものの、ロマンになっていた。ところがその光景は残酷すぎて、ロマンも何もない。死ぬってこういうことなんだと知った瞬間でした。

その死が、エベレストには多すぎた。遺体を見ながら歩くうちに「僕も死ぬかもしれない」と思った。死を感じれば感じるほど動物の本能として、死に対する抵抗が出る。生への執着が出る。でも死にたくなと思うと、心に余裕がなくなります。僕は焦り始めてしまいました。エベレストは登って下りるのに約2か月かかる山です。低酸素に徐々に体を慣らしていかないと危険なんです。ところが僕は早く解放されたくなくて、途中から一気に標高を上げてしまった。素人がよく陥る失敗です。7800m手前あたりで急激な高山病にかかり、意識を失いました。ようやく発見してもらった時は極度の高山病でけいれんを起こして、シヨック死寸前。これはもう遭難です。命

だけはかろうじて助かったけど、大失敗して日本に帰りました。

帰国後の記者会見では容赦ない質問が飛んできました。自信が無くなり、僕はもう諦めようと思った。ところが会見で「失敗だ」「責任問題はどうなる」とか言われると、この口が勝手にペラペラしゃべるんですね。「勢い、若さ、運の3つがあれば何とかなると思っていたが、それが通用しないのがエベレストだった。でも思い切り失敗したために現実を突きつけられて、自分に足りなかったものが見えた」と。足りないものを補うトレーニングをすればいい。「来年はもう一回やります」と言ってしまった。

後悔しました。挑戦はやっぱ怖い。でも挑戦をやめて何にも無い自分に戻るのには、もつと怖かった。もとはと言えば高校の停学から始まった冒険でしたから人生は挑戦するの怖しいし、挑戦しないのもまた怖い。どうせ怖いなら、挑戦しよう。それからは本気でトレーニングをして、1年後にスペイン人の仲間とエベレストに再挑戦しました。

「失敗と成功」を考えさせた 2度目のエベレスト

今度は低酸素に体をきれいに順応させ

なかった。胸を張って日本に帰ろう」と。

帰国翌日の記者会見では前回より、もつと容赦なく責任問題を追及されました。つい4、5日前までエベレストにいた僕には、これはばかにしているわけじゃないけど、会見場の人たちが、コココ、ココと鳴く鶏の群れのように見えました。彼らは、僕が登頂できれば成功、できなかったら失敗だと言う。でも失敗と成功をテーマにすれば、きつと何冊も本が書ける。それほど深いテーマです。きつとそこが人生の、結構大事なポイントなんです。会見場で僕は、失敗と成功との境目はリングの皮一枚のように薄い、と思いました。ただ、生きている現場が違えば失敗と成功の基準は違う。記者さんたちの基準に合わせると僕たちは遭難して死んでしまう。でも彼らは僕たちと一緒に命を賭けているわけじゃない。彼ら、つまり世間の基準に合わせるのもうやめようと思ったと同時に、それをきつかけに「成功と失敗って何だろう」と、凄く考えるようになりました。

「何が何でも登ってきます」と僕が言っていたこと自体、自然に対する勘違いだったことにも気づきました。エベレストの登頂率は約3割です。登れない時は登れない。ならば、一つひとつの勝負で

で、最終キャンプにもちゃんと入れました。そこから彼と共に、夜中に絶好調で登りました。高度計を見ると8500メートルを越えた。残りは高度差で300メートルと少し。もう間違ひなく山頂を捉えられると思った直後、天候が急変した。ジェット気流が落ちてきて山頂で渦を巻き始めた。極めてよくない状況です。途中からは吹雪です。突風で稜線から落ちないよう岩陰に隠れ、ハーケンを打ち込んでロープで自分の体を固定して、じつとしゃがんでいました。行くのか撤退するか。状況を見れば、下りないといけない。でもベースキャンプでは報道陣が待っているし、帰国したらまたほろくそに言われる。猛吹雪の中、悩みました。決断できずに1時間じつとしていると眠くなってきた。死の世界が近寄ってきた。ピタピタとこびりついてきた。でも最後は、人に何と言われようが死にたくないという明確な思いでした。スペイン人に「下りよう」と言うと、彼は「おれは行く」と言う。僕は一人で下りました。冷たいと思うかもしれないけど、冒険家は自分で決めなければならぬことなんです。結果は自己責任です。

凍傷だらけになってベースキャンプに戻ると、みんなが「また失敗ですか」と

白黒をつけるのではなく、自分で今が晩年だと思った時に人生を振り返り、トータルで自分は51パーセントはできたと思えたら、人生を一つの作品として、これは成功と思おう。49パーセントの失敗は良しとしよう。会見場で厳しく批判されながら、そう思うと楽になれました。

最初のエベレストは明らかに自分のミスだったから、記者会見は辛かった。でも2度目の会見は全然辛くなかった。人は人、自分は自分だと思ったから。翌年、3度目のエベレスト登頂は成功しました。僕にとって今まで一番意味があったのは2度目のエベレストでした。あの時の「成功と失敗」についての考え方が、今も自分の活動すべてに当てはまっています。これからも僕の挑戦は続きます。僕は挫折をいっぱいしてきました。年に一度くらいは失敗します。でも失敗すると何かが見えるんですね。人からいろんなことを言われても、その言葉をどう自分のものにして次につなげるかが大事なのだと思います。

皆さんも必ず挫折は繰り返すでしょう。しかし、その経験こそが一番の宝物になるんじゃないかと、僕は思います。

(2012年10月1日、大阪府立国際会議場メインホールにて)



言う。じゃあどうすればよかったんだと、僕はテントの中で寝袋にくるまってしまった。すると、そのスペイン人が遭難してしまつたのです。彼は翌日、奇跡的に他の登山隊に発見されて下ろされましたが、深刻なダメージを受けていました。それを見た時、僕の判断は間違いではなかったと思います。ところが誰もほめてくれない。これは氣まずい。

僕は自分で自分をほめ続けました。自分に花マルをあげた。「これは失敗では